

岳俳句の現在 十一月

(507)

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言。何を表現したいか、これがない。ここから俳句表現は始まる。コロナ禍は一樣に関心を持たざるを得ない句材であるが、心から詠いたい気持が起るだろうか。古風ないい方であるが、やはり僅かでも心が動かされる「感動」がないと真剣に突っ込みができない。コロナ蔓延により不安ばかりが残された現状からどう立ち直るか。いま一番、何を捉え表現するかが問われている。

なぜ職人芸に惹かれるのか—陶土搗く唐臼の音

陶土搗く唐臼の音山 野口美智子

唐臼で唐土を搗く光景とは古風であるが、陶芸家の工房には現存している。固定した臼に長いシーソーのような腕の先に付いた杵を下ろして陶土を搗く。決まった間隔でだけ音が出る。夏深い気配ひとしお。世間の喧騒を断ち、陶芸に打ち込む。職人の世界には美の探求という、俗な人間の時間を超越した価値が存する。そこに懂れるのである。俳句作りも職人芸の一面がある。俗半分、美半分というところか。

十五夜やベリーダンスの胸あらは 小林 貴子

トルコでベリーダンスを見た。臍をあらわに自在に動かす。

菱は水面に浮遊しながら、晩秋には赤黒い実を付ける。硬い菱の実。鋭い角を生やし、怒りの形相を持つ。なぜ棘棘した怒りのかたちなのか。なにかの化身なのか。自然界の不思議がある。

石の聲聴きに磧へ秋彼岸 許勢 元貞

「磧」がよかった。秋彼岸の頃になると、夏の頃の白い磧石も僅かに潤いを持つ。磧の石は唯の石ではない。何かの化身ではないか。ひとつひとつが声を持っている。秋彼岸に磧石の声に耳を傾けるとは、人界を超えた天然の真意に迫ろうとの意欲が窺われる。

夏シャツや一日生くれば一日の穢 志摩 晴樹

夏シャツの汚れも元気で暮らし得た「賜物」。人生百年、ものは思いようで、短い生涯を考えれば、すべてが貴重に感

今月の秀句

夕顔別当びたりと風の止む 宮岡 光子

夜間に夕顔の花の蜜を吸う蛾、海老殻天蛾を別名「夕顔別当」という。晩夏の風がびたりと止んだ暑い夜が想像される。いかめしい蛾が天候を支配している。今の世とは思われない、さしずめ戦国時代。一句が醸す雰囲気は面白い。俳味横溢の意欲作をつぎつきに見せる頼もしい作者。

私がイスタンプブルーで見たダンスは慎ましいもので、掲句ほど煽情的ではなかった。十五夜を背景に胸があらわな踊り子のベリーダンスとは魅力満点。これだけを見にもう一度トルコへ行きたいものだ。しかし、案外、満ち足りるとはどこか切ないものではないかという思いもある。これは歳をとった分別かもしれないが、さらりと大柄な句を作る作者らしい。

青けたならひ握力ついと衰へる 奥山 源丘

「青けたならひ」とは晩秋に吹く北風。雁渡しの伊豆地域特有な呼称で地貌季語。不意に冷たい風に当たると指が強ばり、握力が落ちた感じ。源丘大人の「なげきぶし」。元気な者ほど感度が鋭い。季節の変化に敏感なのである。

鱗雲無期刑といふ重きもの 古畑 恒雄

死刑廃止運動の推進者。弁護士として受刑者に面会しながらの実感には余人が測りたい重さが滲む。過ぎゆく秋、天空を仰ぎながらの嘆息に「無限」の思いがある。さまざまな人生の深みを捉える俳句表現から、人間の生存の多角的なあり方が暗示される。

菱の実の忿怒の形崩さざる 宮坂やよい

じられる。白シャツを一日着れば一日の汚れが付く。この当たり前のことが生きているよろこびに繋がる。

彼の秋に二人して見し佛たち 宮地 良彦

芭蕉の〈菊の香や奈良には古き佛たち〉の名句が思われる。今はなき連合いと見た、とある秋の奈良の佛たち。いまはそれを思い、後年こんなふうに回想することがあの日に予想できたのだろうか、人生行路のふしぎ、さみしさを凝視している。この思いは、長い歴史の中で、人により繰り返されてきたのである。日本人の生きる核には佛を見た思いがある。自分もそのひとりとの感慨は救いになろう。

鶴渡る峡谷の空埋め尽くし ビュシヤール

こうのとりが渡る。ぎっしりと渡る。フランスの峡谷風景に感動する。見たことがないにも関わらず、なぜ感動するのか。端的に俳句に詠み、見せてもらったからである。憧れがあれば、見事な表現は、見たことがない光景であっても人を感動させる。信じ合えば、ことばは通じる。なんとすばらしいことか。

鍋にくたくたく唄ふ布巾や夜の秋 依田 ひろ

いい俳句に出会った。俳句でないとこの俳味、この俗なおかしさは掬い上げることができない。秋めいた夏の夜の余裕。

フェルメールの絵の疲れをり夏の果 瓜田 紀子

整然として隙がない律儀な構図、光による丸やかな色調。

完璧に近い映像を見ると、人間は勝手なもので、「疲れる」のである。自堕落さが恋しい。絵が疲れている。表現がよい。

水叩くやうに寒蟬鳴きはじむ 小伊藤美保子

つくつく法師つくつく法師と鳴く。同じ音程のくりかえしは「水叩く」の比喩が適切だ。急に鳴き出すのもぺたぺたした感じ。夏休みがもう終わる頃のさみしさを思い出す。

黒葡萄種は仏の化身かも 白井小夜子

種がある。種なしがゆき渡っている中で、黒葡萄に種がある。それが仏の化身みたい。ほっとしたものか。珍しい感性である。見落としているところに気づくのがいい。

求道めく鮭の火加減塩加減 三品 史紀

今月の秀句

地下鉄の蟻局の中や夜学生 岩上 諒磨

都市の地下鉄は迷路の極み。蟻局を巻いてどこをどう走行しているやらわからない。働きながら夜学に通う学生は地下へ地下へと延びる地下鉄に頼り、時間ぎりぎりに目的地を目指す。自分の未来を微かに信じて。上昇志向を煽るばかりの現代に生きる、わが道を行く夜学生に私は声援を送る。

と賑やかに秋の鳥がくる。下駄履きの小父さんが電話を掛ける。古さが馴染む町。暮らしにやすらぎがある。

杣人の霧を切裂くやうな斧 西澤日出樹

樵の大きな斧。鉞のような斧が、霧を布のように切り裂く。そんな斧が自分も欲しいとの願望か。鬱々たる気分を切り落としたい気持か。象徴句と読める。

残る蟬に修行のごとく瞑想す 伊藤由布子

いのちとはと考えた作。秋蟬は人の心を鍛えてくれる。

秋の遠足どつしりと岩手山 菅原砂登子

岩石隆々の山だけに「どつしり」の形容に充足感がある。

夏潮の雄島が磯をたたつ切り 荒川 睦子

迫力満点。芭蕉の「雄島が磯は、地続きで海に出である島也」が意識にある。この夏潮は怒濤そのもの。爽快だ。力作。

秋風や仮面の下に顔のなく 広瀬 西山

ヴェネチアの仮面カーニバルではない。大和の国のお能であろう。秋風に吹かれ、仮面（ペルソナ）そのものが本物。あるいはまた、切支丹の殉教の姿などを思う。

この世でもあの世でもなし八月は 清水 慧

八月はこの世とあの世との間に横たわる月。生者と死者が落ち合い手を取り合う月。本当の「いのち」を噛みしめる月。

調理専門に道を究める。鮭の料理一つにも火加減塩加減が難しい。どの塩梅が口当たりいい旨い出来上りに仕上がるか。今日も道は限りなく続く。俳句にも通じることである。

意欲的な季語の発掘——桐生悠々忌

桔梗や桐生悠々忌を修す 田村 道子

桐生悠々とは昭和戦前、世を挙げて戦時体制に向かう中で、反権力に徹し活躍したジャーナリスト。信濃毎日新聞主筆として知られ、一九四一（昭和一六）年九月一日、名古屋で死去した。その毅然たるぶれない主張を桔梗の清冽さで象徴し、生涯を悼んだ作として印象鮮明である。

冷やかや牧の起伏にある気骨 小口 洋子

大景の把握に作者の自信が秘められている。秋冷の牧を描き、牧下ろしが済み、今年のあらかたを回想できる時期。牧から己のあり方を省みている。激しくも鬱にもならないで平常心を保つには自分を信ずる気骨が大事。手応えある句だ。

星の秋浮かせて動く雨戸かな 中溝 玲子

満天の星の夜が更けて雨戸を閉める。コツは少し戸を持ち上げること。端的にこれが「暮らし」そのもの。小津映画の愛される強みを見せてくれたようなほっとした気分がある。

遺構めく電話ボックス色鳥来 峯 敦子

たとえば鎌倉。公衆電話のボックスが町に残っている。わっ

法師蟬今日は遠くの木にて鳴く 高松 正明

「遠くの木」は生前にも来世にも繋がる。優しく深い。

青雲集

強面の颯睨睨すりんご畑 瀬野 史

案山子に代り、鬼のような吊颯が秋のりんご畑を見下ろす番人。風で絶えず大揺れ。世の中が揺れる時代に突入している。句材が新しい。みちのく天童の作者である。

貪欲に生きる生きたちちる鳴く 小林多美子

コロナ禍の鬱々を乗り越えて生きたい。まさに実感だ。

鱒雲天敵無くて塊まらず 上石 哲男

鱒を襲う鮫のような天敵の魚が空にはいない。平和だ。鱒も悠々と泳いでいる。敵の来襲を怖れ固まることもない。一つの着想が生かされている。俳句には表現の面白さがある。

他に岳集、青雲集から推薦候補作をあげる。

新入りは夜這の見張り星月夜 功刀たかね

鈴虫のいのち売られてるたりけり 倉科 繁登

幸呼来と盛岡さんさ盆踊 後藤 冴子

小鳥来るくきき歩く赤ん坊 真弓ぼたん

遠くからくる夕暮や猫じゃらし 石橋 博雄

体操の着地桔梗の開くよな 藤森 文子

○このように推敲し添削する

「や」切れを用いる迷いについて

上の句も下の句も同じ句材を扱いながら「や」で切る。これは句材を強調することで事柄の特殊な見方に注目する場合に用いる。「や」切れでの上句と下句との特殊な取り合わせの場合は当然、別の問題なので、ここでは想定していない。

原句 秋桜や槌音聞きて揺れてをり

井出 富子

推敲 槌音を聞き秋桜の揺れてをり

掲句は秋桜が揺れている光景を詠う。「や」で切るのがいいか、続けるか迷うところ。私は続ける。なぜか。

秋桜が槌音の響きを聞き揺れる。原因―結果を感じさせ。事柄に秋桜を強調するだけの特異な見方がないからだ。

句中に切れを入れないで散文のように続ける。その方が秋桜の楚々とした細やかな詩情が読み手に伝わる。

原句 コスモスや楽しき酔ひに揺る形

阿部 薄荷光

添削 コスモスや楽しき酔ひに揺れてをり

これはコスモスを強調したいものがある。コスモスがほかに原因があって揺れているのではない。コスモス自体が揺れを楽しみ、酔った気分になってしまった。そこを強調したかった。切れを入れないと、コスモスが持つ特殊性に気付いてもらえないからだ。

原句 夏草に翳りと云うもの風の夕

さとう ゆう

添削 夏草に翳りや風の立つ夕べ

「と云うもの」は要らない。説明しなくてもいい。「夏草の翳り」はすぐ想像できよう。切れを入れる。切れで情景が深まる。夏草の翳りをじっくりと思ひ、考える。晩夏である。「切れ」の意識について

原句 死者としていきいきあれかし白芙蓉 森 千恵子

添削 死者は死者いきいきとあれ白芙蓉

死者に「いきいきあれかし」は無理な注文であろう。ここは死者ではなく生きている者へ、死者を念頭におきながら願望する。こんな形が読み手に共感されよう。「死者」の次に切れが入るものと読む。切れの意識が大事な場合である。

原句 重陽や香は彼の唐へ飛びゆけり

山本 正子

添削 重陽や香は彼の唐へ飛びゆくか

「か」の頭韻を踏み重厚な作。最後まで採るか迷った句である。時は重陽の節句。日本の菊の香が本家筋の唐の国まで飛んでゆくという。作者は書家だけに、唐への憧れを句にしたものであろう。私は当然のこととして断定するのではなく、想像する方が効果的かと判断した。推敲し採用したかった。「や」―「けり」なので躊躇したのである。

原句 人の気は寂しきに並木紅初む

赤澤 久喜

添削 人の気は寂しき並木のみづるよ

「寂しきに」が原因、それなのに並木は紅葉が始まった。反対概念を明るい並木の紅葉で想定したものか。切れを意識する。「寂し」で切る。紅葉することを「もみづる」という。

今月は誤字が気になった。特に「水蜜桃」が多い。投句全体の六人が「蜜」を「密」に間違える。三密後遺症であろう。